

帰化植物の話

—ミクリガヤツリ—

全国農村教育協会 廣田伸七

「植調」第41巻4号で写真入りで記載されたものがあまりない帰化植物として、写真をつけて「セイヨウウツボグサ」を紹介したが、今回はセイヨウウツボグサと同じように写真入りで記載されたものが少ない「ミクリガヤツリ」を紹介する。

ミクリガヤツリは1972年、徳島県川島町で流れる吉野川の堤防で阿部近一氏が採集されたという記録があり（採集ニュース77:50）、栃木県、東京都、徳島県、福岡県からも採集の報告がある。

ミクリガヤツリの特徴は、茎の頂に3～4枚の苞葉を着けその中心から3～6本の花序の枝を放射状に広げて、その先端に球形の頭状花序を着けることである。この頭状花序の形はヒメクグの花序と似ているが、ヒメクグよりも大きく、また、ヒメクグは茎の頂に1個しか着けないが、ミクリガヤツリは数本の枝

を出してその各々の枝先に1個ずつ着けるという特徴がある。

●ミクリガヤツリ〔カヤツリグサ科〕

Cyperus echinatus A. W. Wood

北アメリカ原産の多年生。草地や土手、荒地などに生育する。茎は数本そう生し、高さは35～80cm、3稜形で平滑、無毛、緑色だが基部は赤紫色を帯びる。葉は茎より低く長さ30～65cm、幅3～6mm、基部は茎を包み、葉の縁はざらつく。5～7月に茎の先に葉状の苞葉を3～4個出し、このうち1個が長く長さ28～33cm、幅5～7mmで残りの苞葉は短く、苞葉の縁もざらつく。苞葉の中心から長さ1.5～5cmの長短不同の円柱状の枝を通常3～6本（ときに8本）を放射状に広げて、枝の基部中心に1～2個、各枝先に1個、多数の小穂が密に集まって直径1cm内外の球形の花序を着ける。花序ははじめ緑色で熟すと褐色になる。小穂は線形で長さ4～6mm。瘦果は3稜があり長さ2～2.5mm。（注）写真は2003年7月3日、東京都八王子市の草地で撮影したもの。



▲ミクリガヤツリ成植物



▲ミクリガヤツリ花序